

入選

「おじさんありがとう」

東京都・東洋英和女子学院高等部1年

岡崎 美瑛

「あれ、あの人へもしかして…。」

私の学校は、中学一年生の時、全員が“ディアコニア”という活動を行った。視覚や聴覚などに障害がある方のお話を聞いたり、実際に点字や車椅子などを体験し、障害者の方々への理解を深めるのだ。ある日、ひとりの先生が、講演会をしてくださった。その先生は、二十三歳の時に突然視力を失った。健常者から急に障害者になるというのは、私達には想像できないような不安と恐怖があるだろう。しかし、先生はその後立ち直り、結婚もし、子供も一人居るそうだ。そんな先生の素敵なお話を聴いた直後、私はいきなり視覚障害者に出会った。

学校からの帰り道、前から、杖をつけ目をつぶって歩いてくる男性がいた。私はすぐ視覚障害者だとわかり、何か助けてあげられることはないだろうかとワクワクした。ちょうど男性の前に階段があったので、のぼりきるまで見届けることにした。すると、男の人は案の定立ち止まってしまった。「よつしゃ！助けてあげよう」と意気込んでその人の元へ行こうとした。しかし、動けない。足が固まってしまった。「え、なんで？」私は少し焦って、周りを見わたした。周囲にはたくさんの人が居た。しかし、一人も、その男性を助けようとせず、目もくれず歩いていた。私はその光景に恐怖を感じた。明らかに困っている人が居るのに、見向きもしない。自分の心の中にドロップと冷たい感情が流れてきた。すると、私と同じように、その男性を見つめているおじさんがいた。「あの人には負けたくない！」と思い、男性に声を掛けようとしたが、緊張して掛けられない。「もし自分が上手く助けられなかつたらどうしよう。でも、今助けないとあの人は階段のぼれなくて困るしな…」と葛藤が始まってしまった。こうしている場合じゃないのに、と思つても不安で動けない。するとそのおじさんが、「大丈夫で

すか？どこまでいきますか？」と、歩みより優しく声を掛けていた。対抗心を燃やしていたものの、そのおじさんのあたたかな心遣いは素敵で、尊敬に値した。とてもかっこよく見えた。しかし、それと共に、自分は何も出来なかつたという罪悪感がブワッと溢れてきて、とても後悔した。また、どこかでホツとしている自分もいて、悔しかつた。助けたいと思うだけは簡単だが、それを実行に移すのは勇気がいることを学んだ。

そして後日、友人と遊んでいた時、おばあさんが大きな荷物を持って、階段をのぼろうと苦戦していた。私は、「この前のよくなことはするもんか！」と思い、声を掛け、一緒に荷物を持って階段をのぼつた。その時のおばあさんの笑顔はきっと一生忘れない。達成感が心にいっぱいひろがって、助けた自分もとても嬉しい気持ちになれる。「こんなに素敵なことってないな！」と心がウキウキした。

その後、おばあさんとまた会う機会があった。とてもお礼を言われ、素直に嬉しいなと思えた。またそれ同時に、困っている人が居たら、すぐに助けてあげるのは当たり前の環境になればと思った。

これから社会、誰にでも手を差しのべられ、笑顔が絶えない、愛の溢れたものになっていけば、どんなに素晴らしいだろう。私に勇気を与えてくれたおじさんに、心から感謝したい。